



とある学生の
催眠淫恋習白

ヒュブノシス

僕は学園都市の長点上機学園という学校に通う、なんでもない一般生徒。能力開発において右に出るものがない、と言われるこの学校に入れたのは僕の超能力がすごいわけではなく、両親の経済力に依るところが大きい。

おかげで暮らしには不自由しないのだが、能力のレベルアップにはどうにも伸び悩んでいた。

僕の能力は、対象の精神を僕の言葉のとおりコントロールするという他人が聞くと羨ましそうに感じるかもしれない力……なのだが、わざわざ回頭で操りたい相手に命令を伝えなければならなかったり、その言葉の意味、解釈は効く相手次第、と使い勝手は悪い。

ピッと、ボタンひとつで切り替わるテレビのチャンネルのようにはいかない。

具体的には操りたい相手が僕の言葉の聞こえる範囲にいないといけないし、言葉の通じない外国人や、まだ言葉の意味を知らない幼児だったり、言い方は悪いが頭の悪い人間に難しい言い回しをしたり、回りくどい言い方をしても、うまく効いてくれなかったりする。

まあ、催眠術に毛が生えたようなものだ。効くときは確実に分、マシンなだけ。

その不便さから、レベルは5段階評価で2と低い。

そもそも精神操作能力は訓練しようにも相手がいないと成り立たない能力。試せる相手がなかなかいないので、強化しづらいのだ。

……と思っていたのだけど、入学してからわかったことだが、うちの学校は生徒の能力開発に力を入れているだけあって、超能力で生じる不祥事をもみ消す権力があるみたいだった。

そこで僕は一念発起し、能力強化目的で部外者を対象にする許可を学校から取り付けた。

これで万が一、失敗して不祥事を起こしても、払っているバカ高い授業料に見合うだけのもみ消し工作をしてくれる。

僕が実習の被験者に選んだのはわんないきぬほ 湾内絹保と、あわつきまあや 泡浮万彬という女の子。二人共、常盤台〇学の1年生だ。僕の能力を阻害する可能性のある、精神系能力者や電気系能力者でないことは確認済み。

それぞれ、ハイドロハンド 水流操作(水を操る)、フロントダイアル 流体反発(浮力を操作する)というレベル3の能力を持っている。

もちろん、対象者や周囲のものたちに許可なんてとってない。

常盤台〇学も学園都市で五指に数えられるほどの有名なお嬢様学校。だが悲しいかな、学園都市の利益になる能力開発の意図には逆らえず、今回のことは上からの圧力で黙認されるだろう……。

この実習で僕の能力レベルが上がればよし……
よしんば上がらなくても、二人の少女を僕のモノにできるのだ。
僕は湧き上がる興奮を抑えきれなかった。

「あの一、そこでハンカチを拾ったんですが、あなたのじゃないですか？」

知らない人に声をかけるのにベタとも言える手法。
気恥ずかしいが、他にいい方法が思いつかなかったし、
ナンパの真似事をして相手に警戒されるよりはマシだと思うことにした。

「はい？ なんででしょうか。」
なんとか無視されずに前を歩く女の子たちは振り返ってくれた。

「あの……このハンカチなんですけど、あなたのです……ね？」
返事を返してくれた、髪のパフパフした女の子、わんないきぬほ 湾内絹保に話かける。

「あら、本当に……どうして落としたのでしょうか……ありがとうございます！」

彼女は僕が適当に選んで持ってきたハンカチを疑いもせず
自分のものと認める。とりあえず、僕的能力が効いていることが確信できた。

「あ、キミのハンカチも……落としたでしょ。ほらこれ……」

「あら……ありがとうございます！ お手間を取らせて申し訳ありません。」

となりの髪の長い女の子……あわつきまあや 泡浮万彬にも似たようなことをして
能力がかかることを確かめた。

能力が効くことを確かめられたら後の事は簡単に進んだ。

「なぜだろう、君たちを見ていると、僕は胸の鼓動が高まるのを感じるんだ……ドキドキして、体の内側から熱くなって切なくなってくる。これが恋ってものなのかな。だとしたら、なんて運命的な出会いなんだろう……君たちも、僕に対してそう感じている……と、うれしいんだけど」

「……なんだか、そういわれると……わたくし……胸がドキドキしています。」

「はあ……不思議ですわ……鼓動が高鳴って……あっ、恥ずかしいですわ」

二人は身体をもじもじそわそわさせはじめる。
僕と目が合うと、視線を泳がすようになっていた。

「君たちのこと好きで好きでたまらないんだ！
君たちも、僕の事好きで好きでたまらなくなってきた……
僕にはわかるよ……気持ちが通じ合えてきていることを……
おんなじ気持ちになってきていることを……こんなに嬉しいことはないよ！」

「ああ……この気持ちが恋……なのでしょうか。
ふわふわ身体が浮き上がるような、とっても心地よい気持ち……」

「……まるで恋愛漫画を読んでいる時に抱いたような……
トキメキを感じていますわ……」

ふたりとも、僕のちょっとした描写に加えて
それぞれが持っていた恋や恋愛に対して抱いていた
イメージを勝手に膨らませ、心と体を僕で満たし始めていた。

「もっと二人と話がしたいな。僕の住んでいるマンションがこの近くなんだけど二人は時間がある？」

二人は顔を見合わせ、目で確認しあう。
僕の方に向き直るとにっこり笑顔を浮かべて、こくりと頷いた。

「ええ……わたくしたちの用事はもう済んでいますので……
ぜひとも、もっとお話がしていただけますわ」

「わたくしも、あなたのことをもっと知りたいです……
ああ……わたくし、なんて大胆なことを！」

「好きになった人のことをよく知りたいと思うのは当然のことだよ。
さあ、行こうか。二人のことを、もっと知りたいな」

「はい……」

「はい！」

こうして、僕は二人の女の子を自分の部屋に連れて行くことに成功したのだった。

— 恋は盲目 —

今、僕のベッドには三人の美少女が乳房と秘部を露出するという、
あられもない姿で横たわっている。
二人抱きあうように向き合って腕を組み、
アソコを僕に見せつけるように、足を上げ股を開いていた……

部屋に連れ込んだあと、しばらく三人と話しをした。
お嬢様っぽく、ちょっとずれたところはあるものの、気立てがよく
細やかな動作や仕草を見ても、非の打ち所のない完璧さだった。

一目惚れしたと言ったが、それは本当のことだ。
でなければ、能力を試す対象として選んでいない。
二人を見かけたのは、少し前のことだったが、
それからずっと二人のことが気になっていてしょうがなかった。

そんな二人を今まさに眼前にしている。
そして、僕の手で汚せると思うと、興奮が抑えきれないでいた。

そういったわけで感情に身を任せて
思わず大胆な要求をしてしまったわけなのだが、
二人は恥じらいながらも僕のそれに答えてくれたのだった。

「あの……どうですか？」
「よく見えますでしょうか……」

「うん、ふたりとも……とっても素敵だよ。
女の子のあそこって、こんな風になっているんだね……
すっごく綺麗で……エッチな形をしている。」

「そ……そんなふうには言わないで下さい……」

「ああ、恥ずかしい……です。」

「……」が女の子の大事どころだっってわかってはいるけど、
ちよっと触ってみてもいいかな……」

さすがにちよっと思案するけど、すぐに二人は

「はい……あの、痛くしないでくださいね……」

「やさしく……お願いします……」

と……してくれた。



二人の割れ目に沿って手を添える。

「あっ……指が！ 本当に触れられています……」

「ああ……大事な所、見られてしまいますわ……」

そこは僕の指先よりもずっと熱を帯びていて温かった。そのままゆっくり慎重に割れ目を開く。

「すくきれいなピンク色だよ……」
包皮につつまれたクリトリスと、尿道……それに処女膜。
それらに僕の目は釘付けになった。

「はあ、ん……は、恥ずかしいですわ……そんなに
見られては……でも……不思議ですわ
とつても、心が高揚しています……」

「ああ……わたくし……晒しているのですね。
大切なところを……でも、喜んでもらえると思うと……
これ以上ないくらい幸せです。」

「ああ……とつても嬉しいよ。君たちもその反応だと、僕に見せるのはイヤじゃないんだね……」

「はい……なぜでしょう……こんな……お父様にだって見せたことありませんのに……」
「わたくしも……あなたのことが好き……だからなのでしょう……」

「それだけじゃないよ……今、君たちの肉体は発情しているんだ……」

僕は秘部に触れていた手を、お尻、太もも、それから腕へ……と、肌を露出してしていると、ところに範囲を広げ、優しく撫で回していった。

「はぁん……身体に手が触れるたびに……不思議な感覚がこみ上げてきてます……疼うずいてきます……あそこが熱くなって……あーやぁん……」

はぁ

はぁ

「はぁあ……気持ちいいですわ……こんなに素敵な事があるだなんて……今まで知りませんでした……あぁん……」

二人がもたえて身体を動かすたびに、豊かな乳房が押し付けあって形をぐねぐねと変える。

そんな中でも、二人の乳首はツンツと起立して、その存在を主張していた。

「んっ……アーンっ……どうなってしまったのでしょうか……何も考えられなくなってきました……」

「あっ……気持ちよくなって……フワフワ浮いているかのように、心地よいですわあ……」



「君たちの身体が反応しているのはね……僕の赤ちゃんを産みたいって言うてるんだ。その気持ちよさは、僕を受け入れるための準備を始めてる証拠だよ……」

「ああ……そうなのですね…… ンツ 愛しい人の赤ちゃんを産む……」

「なんて、はぁんっ！ 素敵なことなのでしょう……」

すっかり二人はその気になっただらる。

僕は手の指を二人の膣口に這わす。そつと揉みほぐすようにしながら尋ねる。

「ふたりとも、「こ」が赤ちゃん作るための入り口だよ……わかる？
僕の赤ちゃん、「こ」で作って、産んでくれるかな……」

「はぁあんっ！ そこはあ…… はいっ！ お、お願いしますっ……赤ちゃんを……」

「あぁっ……私達に、ンっ……あなたの赤ちゃんを……産ませて下さいっ……」

二人の少女は、ハッキリと僕に向かって答えてくれた。



二人のアソコからは愛液が止めどなく溢れ、滴り落ちてきていた。
息を荒げ、顔はすっかり真っ赤に染まっている。
この様子なら、二人をイカせることもできるかもしれない。
イクことを体験させ、能力によって、自由に再生させることができれば、
この後の性行為も、彼女たちにとって、より素敵なものになるだろう。

「とりあえず二人共一度イッておこうか……」
「いいいく？」
「どにに……ですか？」

「場所のことじゃないよ……女の子の身体で体験できる、とっても素敵なことさ。
今のまま、気持ちいいってことを拒否せず受け入れ続けてっらん……」

いままで意図的に避けてきていたクリトリスに指を添え、
包皮の上から優しく揉む。

「あぁっ………」
「はぁぁんっ……！」

女の子の部位の中でも特に敏感な感覚を持つそこは、
すぐに二人に強烈な刺激を与えた。



「はっ………!! ああんっ!! あっ あっ………身体の震えが抑えられなくっ!!」
「あっ………こんなことがあ………ひあああんっ!!」

体全体を痙攣したかのようにビクビク震わせ、二人は絶叫した。
あそこから潮を吹き失禁する。
「思ったよりスグにイツっちゃたね………すっごいよ、二人共!!」

「はああ、これがイクですか………
あっ………体の震えがまだ………ああんっ!!」

「あっ………はあ、はあ………
とつても素敵なの………
気持ちよさでしたわ………」

「この『イク』って感覚をよーく覚えておくんだよ………慣れたら、
何回でもイかせてあげるからね。」

「は、はい………ぜひ………」
「お、お願い、しまふう………」

二人共しばらくは絶頂の余韻に心地よく浸っていた。

がっ
がっ

ぷんぷん
ぷんぷん

——初体験——

絶頂のほとほりが冷め、二人が落ち着いてきたところで、僕らはずいぶん身体を重ねあう。

僕のペニスは、さっきの二人の痴態を見て、すでにはちきれんくらいに勃起していた。服を脱いで裸になった僕は、二人に見せつけるようにペニスをそそり立たせる。

まずはわんないきぬほ湾内絹保と……だ。

待ちきれないのは彼女も同じようだ。しつかり拭きとったはずの股間からは、愛液がまた溢れていて、秘部を濡らしていた。

そこには無垢なる少女の清楚さや恥じらいは一切存在していなかった。今か今かとオスを受け入れることを待ちわびる、メスの姿そのものだった。

絹保に向かつて僕はいきり立ったペニスを見せつけた。
「これは何かわかる？」

「はい……ペニスです。」

「そんな堅苦しい言い方はダメだよ。他の言い方も……知ってるでしょ？」

「えーと……お、オチンチン……で、いいでしょうか？」

僕の質問に答えるたびに、アソコがひくひくと反応している。

「そう、よく言えました！ 僕のこれをどこに入れるかわかっているよね？ 保険の授業でしっかり習っているはずだよね？」

「はい……膣の中に入れます……」

終始恥ずかしそうに答えるものの、彼女はペニスから視線を離そうとはしない。

「そんなに大きいのが本当に入るのでしょうか……」

「本当に挿入るかどうかわか……すぐに分かるよ……」

顔には早く挿入れてほしいと言っているかのような期待する表情を浮かべていた。

ひい

ひい

「す〜我慢できなさそうな表情だよ……
挿入れてほしいんだね……じゃあ、おねだりしてみても……」

「ど〜ど〜言えはよいのでしよう……
こんなこと、今まで言ったことがなくて……」

「そうだよ。でも……
今、自分が感じているままに言えばいいよ
もう……わかってるはずだよ。」

「ああ……そうなのです……言いますっ
わたくし、あなたの赤ちゃんがほしいです……」

「だから、私の膣内にオチンチンを……下さい。
あなたのオチンチンで、私を孕ませてください……
しっかり産んで、立派に育ててみせますわ……だから……
お願いします！」

「よく言えたね！ 僕ももう我慢出来ないよ……
すぐにも挿入れたくてたまらなかつた！
さあ、いくよ……僕の子種……絹保の膣内に送り込むっ！」

僕は絹保のオマンコに
ペニスの先端をあてがう。

「はっ……あ あっ……」

あ
あ
あ

そのまま力を込めて前に押し進めると、
ピタリ閉じていた割れ目は
ペニスによって押し広げられていった。

「はぁ……あああんっ!! は、入ってきました……あぁっ……!!!」

ペニスが温かい膣壁に包まれる。ぎゅうぎゅう締め付けてきて、油断すればスグにでも発射してしまいそうだ。

「痛くないかな? 我慢できなさそうだったら、我慢せずに言って!」

「入ってきた瞬間は、少し痛かったですけど……す、すぐに気持ちよくなって、それ以上に嬉しいです! 一つになれた喜びが身体を満たしているんですっ!」

「そうか……それならっ……奥まで突くっ! 子宮口に先端を届かせるよっ! ほらっ……どうだっ!」

しっかりと身体を密着させ、ペニスを根本まで膣の中に食い込ませるように打ち付ける。

「はぁあんっ……奥で……ずんずん響いてますっ……ちよっと鈍く痛みが来るけどあぁっ……気持ちいいですっ!! わたくし……こんなにエッチな娘だったなんてえ……でも、とっても幸せえ はぁあん!!!」

僕は夢中で腰を振った。温かい膣壁が僕のペニスを離すまいとしっかりと絡みついてきて、まるで溶けて融合してしまっただかのようにだった。

「万彬も……よく見ておくんだよっ!」

「はい……目が惹きつけられますわ……すごいですわ……こんなにもしっかりと挿入るものなのですね……!」



「はあっ……赤ちゃんの素、出すよっ！ しっかり受けとめてっ！
絹保もイケる？ ほら、さっきみたいにくんたっ……」
今度は僕と一緒にイこう！」

スグに限界はやってきた。オナニーとは違う、ペニスの根本の
更に奥から精液と一緒に、ほかに何かこみ上げてくるものがあるんだ。

「はいつっ！ ああっ……
身体が熱くなってきました……
くださあい……イキますっ……
赤ちゃんの素を受けとめて
しっかり受精しますっ……」

「よしっ……射精すっ……絹保っ!!」

ぎゅっと体を抱きしめる。ペニスの先端が
つんつんっ、固い子宮口をノックする。
と同時に、僕のペニスの先から精液がほとばしるのがわかった。

「はあああっ…… イッくうっん……
ああっ……幸せですっ……あああっ!!」

ひくひくと膣壁が
ペニスを締め付ける。
そのたびにペニスから
精液が押し出され、
膣内に精液が溜まっていく。



「ああ……熱いですっ……
私の身体の中に……
どんどん溜まってきてますわあ……
はああん!!」

「はあ……はあ…… ああん…… ふう…… んっ
はあ…… すこかった……ですわあ」

「……しばらく放心状態だったけど、気づいた？
絹保の膣内……とっってもよかったよ」

「はい……すこく……よかったです！
あなたの愛情が伝わってきましたわ
わたくし、今とっっても幸せです……」

「満足してくれたなら、うれしいよ……」

「ペニスを膣から引きぬく。
名残惜しいが、この後まだ泡浮万彬が控えている。

「思った以上に精液が多量に出たのか、
それとも、元々膣内が狭いせいなのか……
精液が膣の中から溢れ出る。」

「ああ……せっかくの赤ちゃんの素が
もったいないですわ……」

「まあしかたないよ……」

「いえ、きちんとあるべき場所に……
戻しますわ……」

ぶお

トロッ



「おお……す」いな……」

垂れ落ちた精液が重力に逆らい膣の中に吸い込まれていった。まるで逆再生の動画を見ているようだった。

「んっ……はあ……
しっかり戻りましたでしょうか……」

「ああ、すっかり全部、膣内に戻っていったよ……
そうか。こんな能力があったんだなあ……」

調べた時に水流操作能力があることは知っていたが、
純粋な水だけではなく、水分を多量に含んだものであれば
操作可能なようだ。
まさか、精液までも自在に動かせるなんて。

「これなら、すっかりあなたの赤ちゃんを
産めると思えますわ。
かならず卵子まで精子を届けます……」

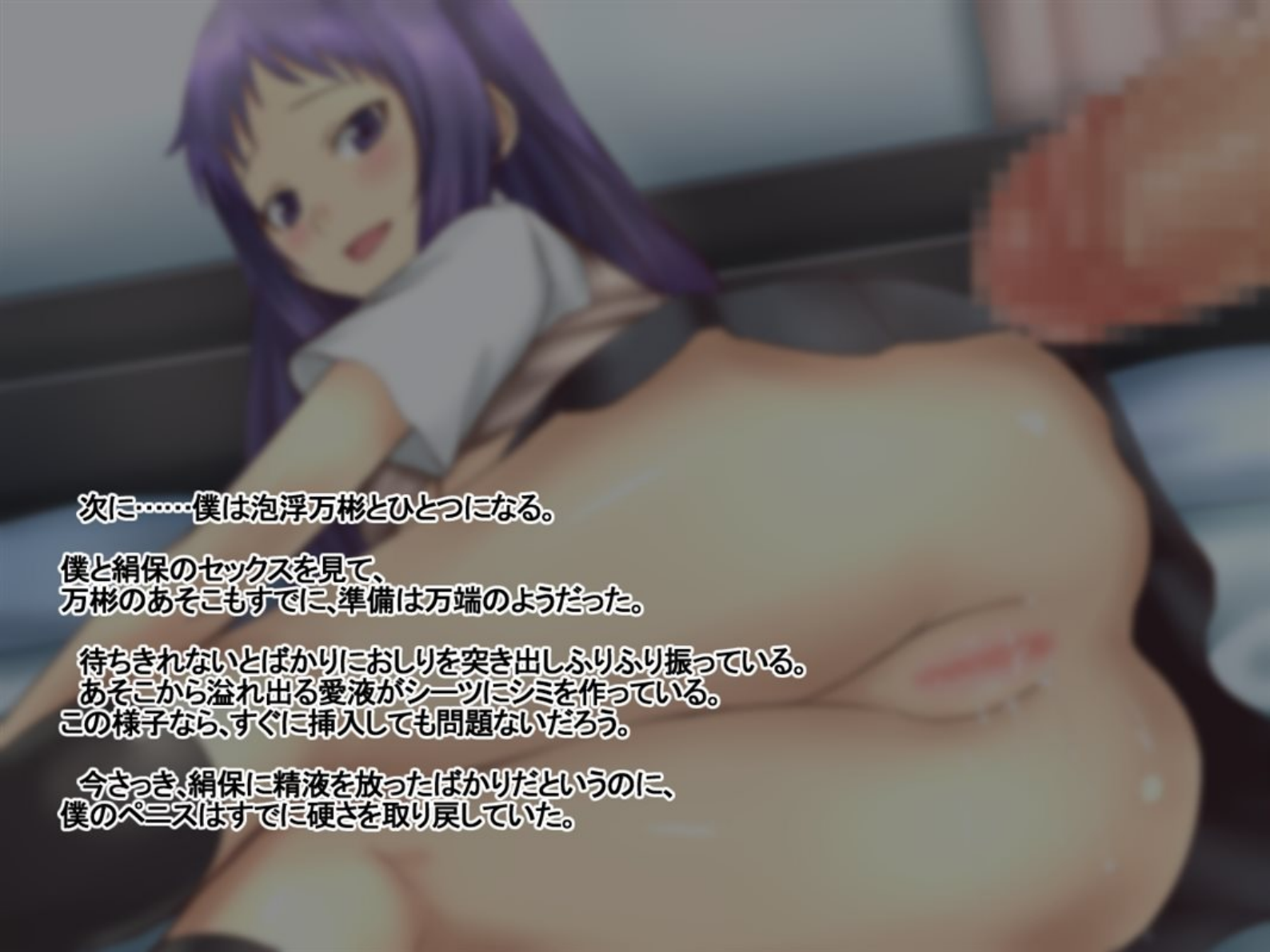
彼女なら文字通り精子を直接
自らの手で届けることもできるだろう。

「そっだね……すっかり届けてよ。
僕の精子を……君の卵子に！」

「……はいっ!!!」

絹保の返事は自信に満ち溢れていたのだった。

ムルムル



次に……僕は泡浮万彬とひとつになる。

僕と絹保のセックスを見て、
万彬のあそこもすでに、準備は万端のようだった。

待ちきれないとばかりにおしりを突き出しふりふり振っている。
あそこから溢れ出る愛液がシーツにシミを作っている。
この様子なら、すぐに挿入しても問題ないだろう。

今さっき、絹保に精液を放ったばかりだというのに、
僕のペニスはすでに硬さを取り戻していた。

「待たせちゃったね……今度は万彬の番だよ」

「はい……お願いします……
わたくしも、絹保さんのように
あなたの赤ちゃんを種付けしてください……!!
元気な赤ちゃんを産んでみせますわっ!!」

「よく言えたね……
僕の赤ちゃん万彬にも産んでもらうよ……
しっかり種付けするから、孕むんだよっ!!」

愛液でぐしょぐしょにまみれた秘部にペニスを押し付ける。

「あんっ……!!」

びくんっ……と、身体が一瞬硬直したように思えた。

「いきなりすぎた? 怖かったりするのかな……」

「いえ……違います……逆です。とっても楽しみなのです……」

は、早く挿入れてください……もう、待ちきれませんわ……

ああ、恥ずかしいっ!!」

本当に待ちきれないらしく、顔には期待に満ちた表情が浮かんでいる。
さっきの絹保どの行為を見たなら、不安を感じるわけではないか。

「わかった……焦らすのはなしだ……行くよっ!!」

僕は万彬の膣内に一気にペニスを挿入した。

「あぁっ……入って……きましたわぁ……！」

軽い処女膜の抵抗を感じたが、そこを一気に押し貫く。

一気に膣の奥、子宮口をペニスの先端がノックする。
肉棒は熱い膣壁にしっかりと包まれる。

「はぁぁん……これが……セックス……
気持ちがよくって……あなたをこんなにも
体の内側で感じられる……なんて幸せな気持ちに
慣れるのでしょうか……」

「あぁ……僕も万彬を感じられて……
幸せだっ！」

欲望のままに身体を動かし、ペニスで中をかき回す。

初めてであろうとも遠慮しない。さっき何度もイカせたおかげで、
絹保と同じようにまぶたく痛がる様子はない。

「はぁん、すごいですわぁ……」

結合部から淫猥な結合音が響き、汁が
次々に溢れだしていた。

「まあこんなにふうに入っていたのですね……
すごいですわ……はぁ……見ているだけで、入っていた時の
感触が……あぁっ」

セックスの様子を見つめている絹保が感嘆のため息を漏らした。

ズンッ

ゴブッ

万彬の膣内も絹保に劣らず、すばらしいものだった。
射精が近づいてきているのがわかった。

「よし……射精すぞっ！ 万彬も、イけいるかなっ
一緒にイクよっ……ほらっ……射精るっ！！」

思い切り奥にペニスを突っ込み、
子宮口にくっつけながらの射精。

「ああ……はああん！！ きましたわあ わ、わたくしも
ああっ イキますっ あああっ！ イク いくううっ！

万彬はがくがく身体を痙攣させ、
全身で射精を感じとっていた。

「産むんだっ 僕の……子供をっ！！」

「はい……産みますっ 元気な赤ちゃん
孕んで……産み出しますっ くううんっ！！
赤ちゃん……産みますう んっ……」

うわ言のように 赤ちゃん産むと、つぶやき続ける。

そんな万彬を愛おしいと思った僕は、
ギュッと包み込むように手を回す。

ペニスから精液を出し終わるまでじっと抱きしめていた。

びゅるっ！
びゅっ

「はあ……」

「あっ……はあん」

絹保に射精した後だということに、
万彬の膣内にもタツプリと出すことができたようだ。

「ああ……満たされましたわ……
お腹の中にしっかりあなたの……
赤ちゃんの素が入っているのを感じます……」

ペニスが柔らかくなってきて自然と膣から
抜ける。ドロリ……と精液が膣から溢れ出た。

「気が早いかもしれないけど、赤ちゃんが楽しみだよ……」

「はい。わたくしも……今から楽しみですわ……
絹保さんに頼んで、わたくしも、
しっかり精子を卵子に運んでもらいますわ！」

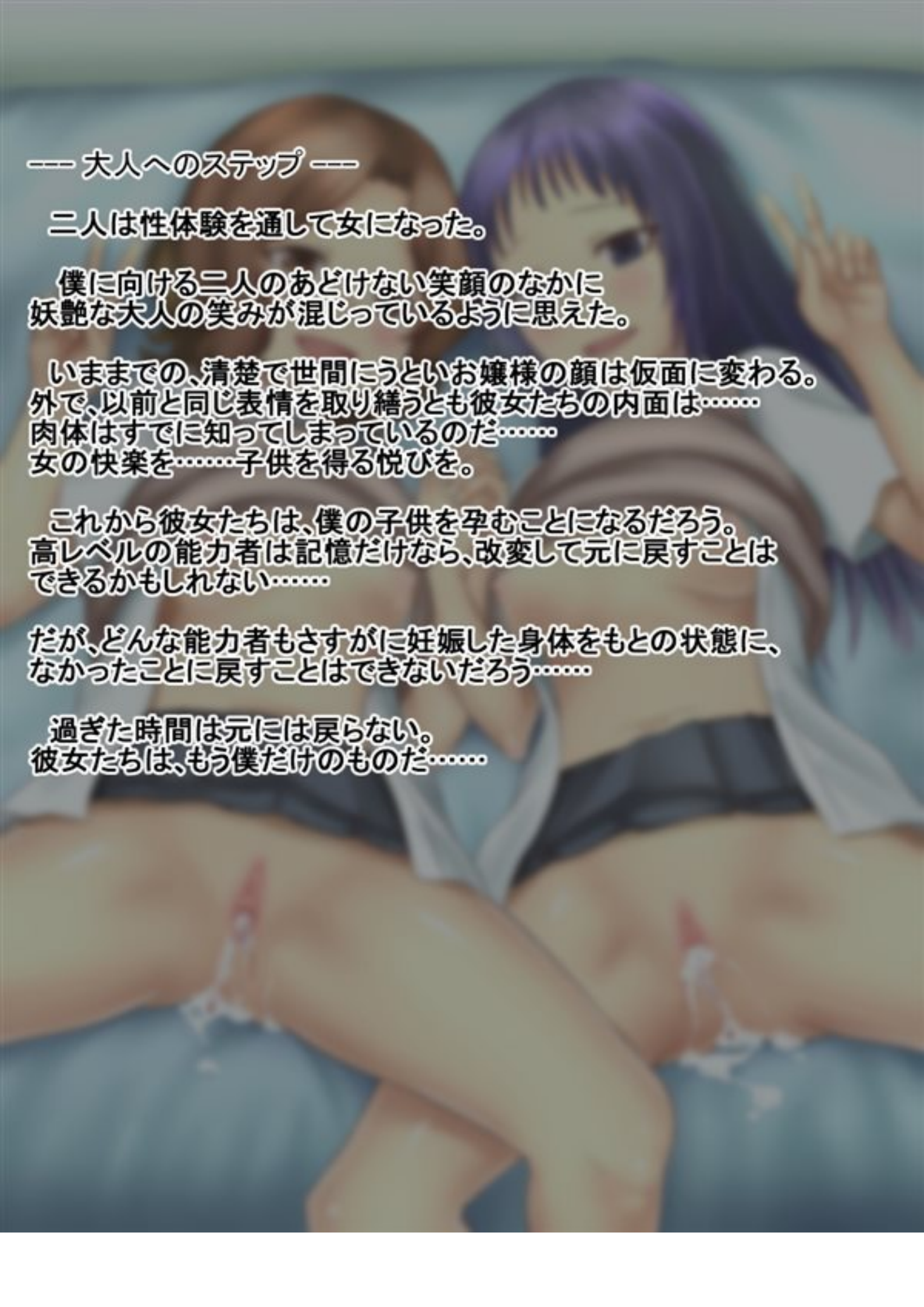
「うん。それがいい……頼めるかな、絹保？」

「はい……まかせて下さい。二人できっと素敵な
赤ちゃんを産んでみせますわ！」

ドロリ

素

あ
ん
は
あ



— 大人へのステップ —

二人は性体験を通して女になった。

僕に向ける三人のあどけない笑顔のなかに妖艶な大人の笑みが混じっているように思えた。

いままでの、清楚で世間にうといお嬢様の顔は仮面が変わる。外で、以前と同じ表情を取り繕うとも彼女たちの内面は……肉体はすでに知ってしまったのだ……女の快楽を……子供を得る喜びを。

これから彼女たちは、僕の子供を孕むことになるだろう。高レベルの能力者は記憶だけなら、改変して元に戻すことはできるかもしれない……

だが、どんな能力者もさすがに妊娠した身体をもとの状態に、なかったことに戻すことはできないだろう……

過ぎた時間は元には戻らない。彼女たちは、もう僕だけのものだ……

「こ、こうでしょうか？」
「ちょっと、恥ずかしいですわ……」
「そんなことはないよ……ふたりとも素敵だ……
とってもいいよ。じゃあちょっとだけ、そのままじっとして……」

二人仲良く腕を組んでピースサイン。僕ににっこりと笑顔を向ける。
その姿を撮影し、バッチリデータに収めた。

能力実習の過程を記録しておかないと、
学校のバックアップを受けられなくなってしまう。
これも大切なことなのだ。
まあ、わざわざこんなポーズを取らせる必要もないのだが……

最初の性交から更に、二人には中出しをした。さすがにもう、精液を膈内には
収めきれなくなったらしく、外に垂らすしかないまでになっている。

二人の様子を見ていると、
僕のペニスはいつのまにか、また大きく怒張っていた。

「ふふ、もっと綺麗にしてあげるよ……」
僕は二人に向かってペニスを擦り始めた。

「まあ……なんでしょう」
「えっ……きゃあっ！！」

二人に向かって射精。
彼女たちの健康的な柔肌に真っ白な精液が振りかかる。

ポトッ

ポトッ

「うん、思った通り綺麗だ……
この姿も写しておかなきゃ……」

「びっくりしましたわ……」
「まだ、こんなに……！」
「あの……もしよろしければ」
「また……この後……」

「ああ……わかってるよ……」

この後僕たちは更にセックスした。
危うく二人に門限があることを忘れそうになるくらいに
濃密な時間を過ごすことができた。

能力のおかげとはいえ……僕は幸せだった。

——女から母へ——

僕的能力で彼女たちに、僕に対する恋心を植え付けてから、毎週末に部屋でセックスするようになっていた。

あくまで、彼女たちの生活は現状維持。

密かに関係が続けていくことに意味があると思っている。

会えない時間に想像を膨らますことで、僕に対する

想いを募らせることができるし、毎日だと

二人相手ではさすがに身体が持たないだろう。

僕と離れている間も、能力が解除されてしまうこともないようだ。

気立てがよく、清楚な彼女たちがセックスの時には激しく乱れる。

何度も抱き続けているけど、全く飽きることはない。

今日は彼女たちが学校で使用している水着を着てセックスをする。

考えて見れば、水泳部だということとは知っていたけど、

水着姿を見たことがなかった。

彼女たちの年齢にしては、成熟した身体つきに、

競泳に適したシャープなラインの水着がとってもよく似合っている。

そんな彼女たちの体内では、新たな生命が宿りつつあった。

「二人共水着がよく似合ってるね」

「ふふ……ありがとうございますっ!」
「気に入ってもらえたようで、嬉しいですわ」

「とっても健康美にあふれた姿だけど……」

「ちよつと、エッチするには、ピッチリしすぎてるかな。」

「水着をめくって、胸やアソコに触れるのもいいのだけど、ちよつと窮屈な感じになる。」

「はあ……そうなのでしょっか?」

「まあ……一体どうしたら……」

「そうだ……ちよつといいこと思いついたから……
じつとしててくれないかな」

僕は机の引き出しから水着を裁断するためのハサミを取り出した……

「よし！二人共、とつても素敵になったよ!! ふう……」

胸とあそこを覆う部分だけを切り取った。
セックスするための主要な部分を露出させて、他は水着で覆う。
考えようによっては、これほどのエロさもないんじゃないだろうか。

「あの……こ、これではもう……」

「学校では使えませんが……」

二人が戸惑うのも無理は無い。
いきなり水着を切られれば、この反応は正常なものだ。

「ああ、ごめん……そうだね。
必要なら、新しく買ってもらえるかな。」

もちろん、代金は僕が払うよ。

この水着は今から、僕とセックスする
時の専用にしてよう！興奮してきたよ……」

「は、はい……わかりましたわ」

「それに……水着を新しく買う必要は、なくなるかも……」

「ん……何か言った？」

「あ、いえ……まだ確証は持てないので……」

絹保が何かを言いかけたようだったが、僕があまりにも
興奮していたからか、言うのをためらったようだった。

二人を上下に重なりあうようにベッドの上で寝かせる。
局部に穴の開いた水着。セックスするため、必要な箇所だけ
ぽつかりと開いたその眺めに、興奮は最高潮。

「いいよっ！二人共……はあっ……いい眺めだ……
それに、いつ抱いても飽きのこない
素晴らしいオマンコだよ……」

「あ……はあ……
ありがとうございます……
あ……あ……」

「はあ……
クリトリスが擦れて……
あ……い……く……」

交互に二人の膣にペニスを出し入れする。
しっかり密着させた下半身のおかげで、どちらかが
僕のペニスで突かれられるたびに、下半身が動く。

すると必然的にクリトリスが擦れ合い、
挿入されていない方にも、快感が生じる。

「ア……イ……ますわあ……んっ！
「はあっ！！わたくしもまたあ…… ああんっ！」

二人共イクためのコツをすっかり
習得したみたいで、何度も何度も身体の底から
沸き上がる快感にその身を浸すのだった。



「よし……射精すよっ！ 絹保……準備はいいねっ!!」

「はいっ……まかせてくださいっ!!」

「よし……二人の中に射精すっ!!」

「ああ……はああ……きましたわあ……」
まずは湾内絹保に膣内射精。

「よしっ……止めてっ!!」

「はいっ……」

絹保の水流操作を
用いて射精しきって
しまっ前に一旦止める。

「今度は万彬にっ……いいぞっ……射精すっ!!」

「はあっ……はあんっ……温かいですっ……」

すかさず泡浮万彬の方にペニスを入れなおし射精する。

一度の射精で二人にはほぼ同時に精液を送り込む。
なるべく不公平が出ないように思案した結果だった。



「二人共、しっかりイクんだっ！」

「はいっ！あっ……イクッ 精子でお腹の中熱くなって……
あんっ……クリトリス擦れて…… イツくう!!」

「んっ！ はあ アンツッ！精子きましたっ……
あっ あっ……オマンコ気持ちよくなってえ
……イキますっ!!」

二人とも、挿入してペニスを
突き入れられている最中から
軽い絶頂には何度も達していた。

「ほおおおっ……あはあん……あっ！ 幸せですわあ……
ああ……オチンチンが私の中で溶けていくみたいです……」

「ああんっ!! 頭が……真っ白になっていきますっ……
下半身の感覚がなくなっていくみたい……」

軽い絶頂の過程で、肉体の感覚はより鋭敏になっていた。
射精をうけ、びくんびくんと、下半身がことさら跳ね震える。
今までよりもさらに大きな絶頂が彼女たちの体内に起こった。



「はあ……二人共とってもよかったよ……」

「ありがとうございます……
はあ……」

「んふっ……うれしいですわ……
あんっ……」

ペニスを引き抜くと
二人のアソコから精液が滴り落ちる。

いつセックスしても、
二人の膣は締りがよくなって
ペニスをぎゅぎゅと
包み込んできて、気持よかった。

今日は特に反応がよく、
二人の感じ方も違っていた気がする。

「じゃあ、最近恒例になったあれをしてみようか……」

「はい……今日はきつと違う結果が
見られるかもしれないです……」

「え、本当？」


「はい……生理が予定の日を過ぎててもこなくて……」

「そうか！ じゃあ……
今日こそ反応が出るかも
しれないんだね！」

「はい……私達」

「きつと、妊娠している
はずですわ」





僕は妊娠検査薬を取り出し、二人の位置を確認して、適切だと思われるところで持っている指を固定する。

「じゃあ万彬、頼むよ……」と、万彬に声をかけると、

「はい。わかりました……んっ！」

妊娠検査薬は僕の手を離れる。流体反発の能力により、その場にふわふわ浮かぶ。

僕は今から二人がする行為をじっくり眺めるために顔をアソコに近づけた。

「よし、ここならよく見えるよ……じゃあ、おしっこだしてみようか。」

「はい……恥ずかしいですが……ん……」
「んっ……はあ……あっ まだ見られてしまいますっ……」

二人は下半身に力を込め、いきみ始めた。

んっ

あ

「はぁ……で、出ますっ」
「ああ……わたくしも……んっ!!」

二人は同時におしっこを放つ。
絹保は水流操作で器用におしっこを操作して
先端の吸収体に当てる。

万彬のほうは、ふつうにぼしゅぼしゅと
ひっかけるように吸収体に命中させていた。

「ふたりとも、ちゃんとかかったよ。
今日もいっぱいおしっこでたね……」

「は、はい……また、見られてしまいましたわ……ああ」
「はぁ……恥ずかしいです……でも……だんだん……」

お尻の穴や膣中の子宮口まで見られることに
抵抗がなくなり、中出しに悦ぶ女の子も、
おしっこをするときには、いまだにちよっと恥ずかしいらしい。



「よし……じゃあ、しばらく待とうか」

説明書のとおり

おしっこを吸収体にかけて検査薬を

机に水平におく。

結果が出るまで一分ほど待たなくてはならない。

いままでも何度か同じように試してきたけども、

それは、妊娠してないとわかりながらやる、オアソビみたいなものだ。なんの根拠もなしにいきなり妊娠がわかるほうが珍しい。

本当に妊娠しているときは、今日みたいに、

いつもの生理がない……だとか

なにかしら予兆があるものだ。

「ああ……ドキドキしてきましたわ……

もうすぐ、ハッキリとわかるんですわ」

「はい、楽しみですわ……
うふふ……」

ふたりとも、妊娠していることを確認しているようだった。

自分自身の体のことは、彼女たちが一番わかっているだろうから、

それも当然のことだろう。

「さあ……結果は……と」

いつも以上に緊張する……
僕は妊娠検査薬を手にとりて見つめた。

左側の判定窓には……
右の終了窓と同じように
しっかりと陽性反応を示す
青いラインが浮き出ていた。

「二人共、見えるかい？ ほらっ！」

僕は妊娠検査薬を手に取り、二人
人がよく見えると「るに差し出した。

「まあ……やっぱり……反応があるんですね！」

「わたくしたちの中に……あなたの赤ちゃんが……」

「ああ、そうだね！ とっても嬉しいよ！」

「私達も、とても幸せですわ！」

「ああ……こんなにも幸せな気持ちになれるなんて……」

二人の顔に笑顔が浮かぶ。その表情は、少女でも
女でもなく……母性に満ち溢れた母親のようだった。



「改めて、医者に診てもらわないとダメだけど……
妊娠がわかったからには今後のことを考えないとね……」

「このまま順調に行けば、二人は学校に通うのもままならなくなる。
僕がレポートを続ける限り、学校のバックアップにより、この学園都市内で
不自由なく暮らせるように手は回してもらえるのでまず心配はいらないだろうが。」

「お腹が隠しきれなくなったら、僕と一緒に暮らそうね……それまでは、
なるべく今までどおりの暮らしをしてた方がいいだろう……」

「はい……まだまだ私達は若輩ですから……」
「人として、母として学ぶことはたくさんありますので、
勉強はできるだけ続けたいです」

「安定期に入るまでは、セックスはおあずけになっちゃおうね……
そのかわり、といっってはなんだけど、二人にしてほしいことがあるんだ。
聞いてくれるかな？」

「はい……赤ちゃんに影響がないことなら……」
「あなたのために……いたしますわ」

——フェラチオ精飲レッスン——

二人が妊娠していることがわかって、とても幸せな気分だった。これからは二人の体のことを特に気をつけなくちゃならない。

妊娠中のセックスは流産や早産につながるのではないかと思われているが、実際のところはよくわからないらしい。

妊娠経過が順調であれば、膣内射精も大丈夫なようだ。

早期の流産は、胎児の異常が原因である場合が大半だとか。

……といっても、妊娠初期は身体が大きく変化を遂げる時期。妊娠性ホルモンや、疲労、つわり……と精神的にも肉体的にも負担が大きくなる。

僕的能力で、セックスに対して不安を抱かせなかつたように、良い方向に二人の気持ちを導いていければ……と思っている。

僕の言葉は、彼女たちにとって魔法の言葉。精神が肉体に及ぼす影響は大きい。安心感が増せば、それだけ健やかにお腹の赤ちゃんも育つというものだ。

……それはそれとして、僕の性欲処理を何とかしなくてはいけない。

妊娠中性行為をずっと我慢しているのは

僕のような盛りのついた時期の人間には酷なことだ。

僕はいままで、せっせと膣内に出すことしか考えていなくて、

フェラチオなど、他のプレイをしてもらうってことをしてもらっていなかった。

良い機会なので、彼女たちには口技を磨いてもらおうと思う。

「はむ……おむ……ふもむむむっ!」
「ああ……上手だよ……口の奥まで飲み込んで……うっ!」

僕のペニスが絹保の口にすっぽり包まれる。
暖かくって、唾液でヌルヌルのそこは、
腔内に勝るとも劣らない。

「そのままゆっくり……」
口の中から引き出して「覧……」
あ、完全に抜いたらダメだよ」

口から唾液にまみれた
ペニスがあらわれる。

「オマンコと同じように、
チンコに唇がまとわりついて
伸びきってる……」

「ひゃあ……はずかひい……れふ」

きれいな彼女の容姿が歪む……
僕にしか見せることのないであろう表情だ。

「そこら辺で止めて……そしたら、またチンコを
口の奥に入れて……これを繰り返せるかな。」

「ふあい……がんばりまふ……んっ……んもっ!」

ぬもも

んもっ

「んぶっ………ほぶっー」

さすがに偏差値の高いお嬢様学校に通うだけあって、
すぐさまフェラチオのヨツを掴んだようだ。
拙つたかった動きは最初だけで、
すぐに口の中に自在にペニスを出し入れするようになる。

「おむ………しっろ………ほむ」

万彬は僕の陰囊いんのうを咥え込み
コロコロと回の中で転がす。
適度な痛気持ちよさが、
射精を食い止めてくれて、
長いこと絹保のフェラを
楽しめていた。

「はあっ………二人共すごく上手で
すごく気持ちいいよっ！
さすがにもう我慢も限界かもっ！」

気を良くしたのか、二人は
更に熱心に回を動かす。

二人の奉仕を見ていて、ぼくは
このままふつうに射精してしまうのは
もったいないな………と思った。

しっろ……

「こ、こうれふか……?」

とあるアイデアを思いついた僕は、
絹保に尿道に唾液を送り込ませた。

「んっ……うおっ……」

入ってくる……はあっ!

準備、出来たかな?

「はい……できまひた……」

唾液を精液と混じらせ、
自在にコントロール
できるように頼んだのだ。

「よーし、二人の能力が揃ってないとできない、
面白いことしてみようか……
……こうするんだよ」

僕は考えついた案を二人に説明する。

「ふあい……」

「わかりました……やってみます」



ペニスを挟んで二人が向かい合わせになる。

「よし、擦こすっていいよ……射精でそうになったら言うから……」
「よし、タイミングを合わせて頼むわっ！」
「はい……まかせてくださいっ……」
「バッチリ、合わせますわー！」

「ああ……あっ……とっても気持ちいいよっ！」

「も、もう少しで射精でそうだ……」

「いつでも、どうぞっ……」

「さあ……」

手の握りが強くなって、
よりしごく速度が増した……

二人の手が僕のペニスを、ゴシゴシ擦る。
徐々に射精の感覚が込み上がる……
先走りの汁がこみ上げ、肉茎に伝わり落ちた。

バキュームフェラというものがある。

ただ啜すすめるだけではなく、口で掃除機のように、
ペニスを吸い込みながらフェラをする。

そして、射精時にあわせ、尿道から精液を吸い上げると、
腰が抜けるほど気持ちが良いという……

絹保の能力なら、フェラチオの技巧をあげなくとも
それができるのではないか……と思ったのだ。

「で、射精するよっ！ 絹保っ！ うああっ！……！」
「今ですわっ……はいっ！」

自分で出すのではなく強制的に
体の内側から精液をめぐり出される……
そういった表現が適切な新しい射精感覚。
「うお!? おおっ……!! こ、これは……
気持ちよすぎるっ……！」

「まあっ……！」

「すく……出てますわあ……」

がくがくと腰が震え、一瞬意識がとびかけるほどの快感が下半身を襲った。

「それっ！」

向かい合う二人の間に勢い良く精液は撒き散らされ……ることではなく、
上空に飛び散った精液はそのまま空中で静止して段々ひとかたまりにまとまっていく……

どぎゅるるるる
どぎゅるるるる

ブル……

がっ がっ

ふたりの間にひとかたまりになった精液がフワフワと浮かぶ。

「じゃあ……見てばかりいないで、精液舐めてようか……」

「はい……んっ」

「あ……んっ」

おっかなびつくり舌先で精液を舐めとる。

二人にとって初めての経験だ。

「さあ……精液はどんな味がする？」

「生臭くって……ん」

「ちょっと苦味があるような……」

要はうまくはない……ということだろう。

だがそれは想定内の反応だ。

「精液は舐めているとドンドン甘くなってくるんだよ。

蜂蜜みたいに甘くておいしい……」

ねっとりとした食感がもうやみつきになって……」

よくある酸っぱいレモンを甘く感じさせる催眠術。

それと同じように、二人の味覚の操作を試みる。

「あら……だんだんと……甘く、なってきましたわ！　なんとということでしょう……」

「まあ……本当です！　すごく……美味しいですわ！」
ふたりにうまいこと精液の味を蜂蜜のような甘いものと認識させられたようだ。

「じゃあ、遠慮なく精液を吸い込んでいいよ。
あ、口の中に入れるだけ……だよ！
まだ飲んじゃダメだからね！」

「ふあい……ン……ズツ　ジュツツッ！
はあ……美味し……」
ズツズツ

ズツ

「ン……ズツ……ジュズズツ……
まるやかで……不思議な触感です……」

「二人共、夢中になって吸い付いてるね……
精一杯二人のために射精した僕としても、とっても嬉しいよ！」

あつというまに、精液は二人の回の中に消えてゆく……

精液がなくなってくるとくるにつれて、段々二人の顔が近づいていって……
ついには二人の唇が合わさった。

「いいよ……そのままキスしながら精液と二人の唾液を混ぜあわせようか……」

「ふあい……んぶっ んっー」

「んちゅっ はむっ…… ンムっ……」

「ふふっ……いいよ。もっともっとと

混ぜあわせて……唾液と混じって

精液はもっともっとと

美味しくなっていくんだ……

じっくり舌で味わうんだよ……」

「ふあ……おいひいれふう……」

「ああ……もっふお……」

僕の精液と二人の唾液が入り混じったそれは

幾度と無く二人の回の間を行き来する。

時々口から溢れでるけど

こぼれ落ちる前に二人の能力でしっかり回収されて、

元通り口の中に収められていった。

んちゅっ
はむっ
ンムっ
ふあい
んぶっ
んっー

「よし……じゃあ二人共そこに並んで……」
二人は僕から離れ、床に膝をついて仲良く並ぶ。

「回の中いっぱいになってきたね……」
「精液と唾液が混じって美味しいだろう？」

「ん……」

「ラム……」

頬が膨らむほどに口の中に溜まっているおかげで、
二人はコクリと頷いて返事をする。

「もうちょっとで、飲ませてあげるよ……」
そのまえに……僕に口の中がどうなってるか
見せてもらえるかな？」



「んあ……はあああ」
「ん……まあ……」

二人は口をめいっばいに開いて、僕に回の中を見せつける。

「思ったとおり……
すごいよ……ふたりとも回の中が、
精液で真っ白だ！」

「ふあ……」「あはあ……」
僕が喜んでるのが嬉しいのか、
二人の顔にも笑顔が浮かぶ。

「こんなに大回を開けていても
精液がこぼれ落ちず、
口の中にしっかりとどまっている。」

二人の顔を見てみると、
ペニスが再び大きくなってきたのを
感じていた。



「よーし……しゅんしてみようか。上手に飲めるかな……？」

「ふぁ……んぐっ……んぐっ しゅん……しゅん」

「ん……ぐん……しゅん」

ゼリーのようにはるはるしていた
精液は唾液と入り混じって、
程よく飲みやすい粘度になっていたようだ。

ふたりとも難なく回の中のものを飲み下した。

「はぁ……とっても、おいしかったです……」

「はぁん……もう……飲み干してしまいましたわ……」

目を閉じながら、名残惜しそうに
回内に残る香りと味を反芻していた。

しゅん……しゅん……

「また、回の中見せてくれるかな……」

「はい……んあー ああ……」
「どうぞ…… あー……」

「精液はおいしかった？」

「はい……とってても」
「まだ、飲み足りない
くらいです……」

「そうか、それなら……」

「ちようどまた射精そうになっているから……」
「回で受けとめてくれるかな？」

「はいっ……どうぞ
射精して下さい」

「しっかりと受けとめて
みせますっ」

「よしっ……もう少しで……射精るっ……」
「おかわり精液……かけるよっ！」

さっきまで真っ白に染まっていた舌は、
元通りの健康的なピンク色に戻っている。

二人は餌をねだる雛のように、
さらに回を大きく開いた。

ミユッ
ミユッ!

ペニスの先端から精液が勢い良く飛び出す。
今日は既に何度も射精しているというのに、まったく勢いは衰えていなかった。

「それっ！ うまく受けとめられるかなっ！」
わざと体全体に振りかかるように、ペニスの先端を揺らして精液を飛び散らした。

ポト

「はぁん あっ……
これでは
受けられませんわ……
ひゃんっ！」

ユル
ユル
ユル

ド
ド
ド
ド

「あっ……意地悪しないで……
くださあい。あんな、熱いです……」

二人を白く染め上げた。
顔や胸に精液は降りかかり、

ポト

「ふう……ふたりとも、とっても綺麗だ……」

「あはあ……ありがとうございます……」
「そう言っていただけだと……うれしいです……」

二人はうっとりした表情で、
僕を見つめていた。

「三人でお互いの身体についた精液、
舐めとって」ちゃん……」

「はあい……」
「わかりましたあ……」

ふたりはお互いの体についた精液を
美味しそうに舐め取りあったのだった。
この分なら、きっと妊娠中でも、
欲求不満をためてしまうことはないだろう。

「明日も休みだよね……
泊まっていっかい？
今日は特別な日になったわけだし……
ああ、きつと許可はとれると思うよ。」

「はい……ぜひ！」
「一緒に……居たいですっ！」
一息ついて、ようやく僕は身体に疲労を感じた。
今日は3人一緒に良い夢を見られそうだ。

——腹ポテエッチ——

僕の赤ちゃんを宿した二人。

妊娠初期のつわりや、精神不安は、特に問題なく順調に経過してこれた。二人のお腹は膨らみがいぶ目立つようになってきている。

二人はすでに学校は休学中。

僕の部屋で二人で一緒に仲良く暮らしている状態だ。

性欲盛んな僕達は、こんな状態にあっても互いの肉体を求めあっている。赤ちゃんのために、ソフトセックスを心がけていた。

精液は子宮を収縮する効果はあるらしいけど、それで陣痛が始まってしまうようなこともないらしい。とはいえ、不安なので膣内射精は控えている。

そのかわり………とっては何だけど、アナルを開発して、そっちに射精するようになっていた。しっかり事前に洗浄して、殺菌も心がけている。

膣は出産が楽になるように、産道を拡張中だ。

僕的能力では、筋肉をある程度

弛緩させることはできても、

自由自在に広がるようにはできないので、地道に広げるほうが確実なのだ。

「はあっ……万彬のお尻、オマンコに劣らないくらい熱くって……
ぎゅっぎゅっチンコ締め付けてきて……うっ……気持ちいいよっ」

「ああ……そんなこと……ンッ！ 恥ずかしいですわあ はあん……
「でも、尻穴でチンコくわえ込むのも、気持ちいいだろっ？」

「はい……とっても気持ちいいですっ……」

もっど、オチンチンで……わたくしのお尻をっ ああっ！
じゅぽじゅぽっでオネさっ……ああ……軽くイッて……ンッ！

「よーし……もっどもっど僕のチンコをお尻の中で感じるんだよっ……」

「はっ……はあ マン……」

万彬とアナルセックスをすると同時に、
絹保の膣に口を押し当て舌でペロペロと舐め回す。

「はあっ……アアんっ！ 舌が……入ってきてますっ……」
「ああ……愛液ドンドン溢れてきてる……舐めても舐めても無くならないよっ……」
「んっ！ 恥ずかしいですっ……ああっ……イクっ……きてますっ！」

ズッ
ズッ

No.1

膣には、出産するときのことを見越して、シリコン製の球で拡張を試みている。

「ひゃうっ！ あっ……はああ オマシコに入った球とオチンチンが中で擦れてっ！！ わたくしの気持ち良い所を擦ってきますっ……あっ！ ハァンっ……ま、また……きてっ……んっ……」

球とペニスが入りやすい内壁を通してこすれあった。その刺激を受けて、万彬は軽い絶頂を繰り返している。

今やずっと直径5cmくらいのものだが、出産にむけてもっと大きなものを入れていく予定だ。年齢の割に肉付きがよく、安産型のいいお尻なので骨盤も広い。このまま順調に行けば普通の出産で子供を産み出すことができるだろう。

「はあっ……力が抜けて……あっ……」
万彬のからだだが脱力する。バランスを崩し絹保に寄り掛かる。

「私がしっかり支えていますから……たくさん、イってくださいなー！」「あ、ありがとうございますっ……ああ……大きいのが……きます……ああ……わたくし……イキますっ……んあああ……！！」

万彬の度重なる絶頂による、
尻の収縮を受けて僕のペニスも限界だった。

「僕も、射精するよ……お尻で僕の精液飲んでっ……!!
腸壁でしっかり精液吸収するんだっ!!」

「はいっ! 下さいっ! 熱い精液……」

「わたくしに飲ませてくださあいつ!!」

「イクよ……くあっ!!」

万彬のおしりの奥にペニスをぐっと押しこみ、
中に大量の精液を吐き出した。

「ああ……入って、きますわあ……はあ……」

「ぶるぶると体を震わせる。精を受ける喜びを体全体で表していた。」

んああ

「まあ……すこいですわあ……」

「あつ……わたくしおし……がでちやいます……」

「このまま……お口に向けて出して……よろしいですか?」

「ああ……出していいよ……僕の口……いっぱい……いいよ……」

「はあ……出します……いっぱい……出しますわあ はあ……はあ……はあ……」

僕の舌攻めで尿意を催した絹保は、僕の口に向けおし……を放った。

いっ
あつ!

んああ
んああ

「はあ……いっぱい頂いてしまいました……
おなか、満たされています あんっ……んふんっ……！」

うつとりとした恍惚の表情。

そこには、妊娠してからよく見せるようになった
慈愛に満ちた母親の顔ではなく、れっきとした雌の顔だった。

射精が終わって柔らかくなってきたペニスは
自然とお尻から抜けおちる。尻穴からは精液が滴り落ちた。
万彬はすっかり脱力しきっている。

「あんっ……あ……出てしまいましたわ……」
マンコに入っていた球がぽんっという音とともに吐き出された。

「あ……んっ……はああー すっきりしてしまいました…… はふ……」

絹保の放尿も終わっていた。放尿しながらからかく絶頂し続けていた。
そのあともしばらくひくひく腰を震わせて、余韻に浸っていた。

ぷんぷん

ぷんぷん

ぽんっ

ぽんっ

ぽんっ

すこしの休憩を挟んで、
今度は絹保のおしりにペニスを挿入する。

「あつ……ハアアンっ!!き、きましたわあ
おしりっの穴……広がってえ……」

バックから突き入れると、
ペニスは吸い込まれるように
根本までおしりの奥に入ってしまった。

「では……失礼しますわ……力を抜いて下さいね」

「あつ……はああつ……こっちも広がっちゃいます……」

万彬が絹保の膣に手を入れる。

万彬と同じように膣を拡張しているので、
女の子の手くらいのサイズであれば、すっぽり入ってしまうのだ。

絹保の内壁越しに万彬の手とペニスが擦り合わされる。

「くっ……指がペニスに当たるッ……」

「あつ……!!ひやあんっ!!中で……ごりごりこすれあつて……
イっくっ!!あつあつはああんっ!!イってますっ!!」

膣とアナル両方を同時に攻められ、
膣内絹保は絶頂に達し続ける。



「もっと……感じてくださいな……」
万彬が舌を僕のお尻の穴に
這わせ始めた。

「うはっ……これはっ……
ああ……気持ちいいよっ……」

生暖かく湿り気を帯びた舌先が、僕のお尻の穴をこじ開け、
ずんずん押し込こまれてくる。

「うあっ……くくすぐりたいけど……これはっ?! はあっ……」

尻から生じる快感を「まかすように……
僕は腰のふりをはやくしてしまっ」。

「あっ……そんなっ……激しすぎますっ!! あっ……はあっ……」

お腹の中の赤ちゃんのことも考えなくてはいけないのに……

「あっ……気持ちよくて、止められないよっ……」

「はあんっ……お奥でオチンチンが膨らんできてますわっ……」

僕は射精が近づいているのを感じた。

「で、射精るよっ!!」
絹保の中にもたっぶり
精液あげるからねっ!!」

阿吽の呼吸で万彬が
射精のタイミングに合わせて
僕のお尻の穴におもいつきり吸い付いた。

「くっ……イクっ!」

「あひいん……はあ……中に……
きましたわあ」

同時に万彬の手が「ごりごり」と、絹保の膣内をかき回す。

「ああっ!万彬さんの手が……かき回してっ!!
はああんっ イキますっ イクっ!
ああっ!」

「あはっ……すっイクっぶりだ……」

「あっ あっ あおっ…… はおんっ!」

万彬の手はなおも膣をかき回し続け、
そのたびに絹保は、獣の咆哮のような喘ぎ声をあげ続けた。

あっ

ほおんっ

どっ
ぱっ
ぶびゅるるっ

射精し終わったペニスがすっかり柔らかくなり尻から抜ける。

「あっ！ はあ……はあん……」

「ぶっ……ぶりゅゆっ

という音を立てて尻から精液が溢れだしていた。

「や……恥ずかしいですわ……

でも、力が入らなくて止められ……やあん！」

「まあ、ふふ、お尻の穴も、膣も開きっぱなしになってますわ……きれいなピンクの子宮口まで……しっかり見えています」

「ああっ……そんなに見ないで下さい……」

フィストファックされた膣はまだ手が入っているかのようにだらしなくぽっかり開いたさまを万彬に見せていた。

「二人共とっても良かったよ……」

「これから、赤ちゃん生まれる直前まで、エッチしようね！ しっかり愛してあげるよ……」

「はいっ……うれしです……」

「お願い……致しますわー」

赤ちゃんが産まれるまでまだまだ時間がある。でも、この調子なら今後の性生活も、全く問題なさそうだ。

ずるん

くぱっ

ぷりゅ

びゅ

——出産前からの母乳マッサージ——

臨月を過ぎて、二人のお腹は、はちきれんばかりに膨らみきっていた。いつ出産が始まってでも不思議ではない。

それでも僕たちは抑えきれない性欲を満たすためにお互いの肉体を求めあっていた……

最近では二人の乳首を舐めていると、甘いミルクの香りが漂ってきている。母乳が作られ始めているのだ。

調べてみたところ、赤ちゃんが生まれたらみんなきちんと母乳が出るかというと、出が悪かったり全く出ない人などもいるらしい。

生まれる前から母乳を出やすくするためのマッサージなどもあるというし、こころはひとつ生まれてくる赤ちゃんのためにも、たくさん母乳が出るように、たっぷりと愛撫してほぐしておくのが良いだろう。

「あはぁん……うふふっ くすぐったいですわ……」

僕と万彬の二人がかりで絹保のおっぱいに吸い付いていた。ぺろぺろ舌先で転がしたり、むちゅつと吸い付いてみたり母乳がでてくれそうな刺激を与えながら弄る。

「あっ……アンツッ！ オチンチンがっ……」

同時に、僕はペニスを膣内に挿入。

あんまり激しくしすぎないように、ゆっくり優しいピストン運動で膣内をかきまわす。

ム……

「はぁんっ……ああ……
むずむずしてきますっ……
最近特に敏感になってきて……アンっ！」

「すっごく甘い匂いがしてますわ……んっ……！ はむ……」

あむっ

「もうすこしで、母乳でそうだ……あむっ……早く出ないかな……
ほら、出しちゃおうよ。甘いミルク、僕達に出して……らん……」

アッ

スニッ

「いいねっ!! 赤ちゃんにイカされちゃおうか……僕も手伝うよっ……!!
んっ……はむっ……」

「では、わたくしも……かむっ……ちゅるるっ」

「はあっ!! 乳首を……そんなにぎゅって噛まれたらっ!!
敏感になってるのにい……
ひやっ!! あっ……はあっ……」

乳首を優しく甘噛みするだけで、すごい感じ方をする。
さらに僕はペニスを突く速度を早めて
子宮口をズンズン押しこむ……
そのまま射精できるようになるまで、早ぶらせていった。

「ああっ!! 赤ちゃんがもっと激しくなってえ……」

僕にもハッキリわかるくらいに彼女のお腹が
うちがわかららばこっぽこっぽと押されている。
赤ちゃんが蹴っているのだろう。



「も、もうだめですっ イッ……くっ！ はあっ あっ あっ……やああんっ!!」

絹保はびくびくくっ、体を震わせ絶頂に達した。 膣内ながぎゅぎゅぎゅ僕だのペニスに絡みついてきて、僕も絶頂に導かれた。

「ああっ……僕もイクっ！ 赤ちゃんも僕の射精感じるかなっ！ うっ… 膣内なで射精すよっ!!」

「あっ……はおおおっ

あ、熱いのがいっばいきてえ……わたくし、もう……

母親なのに、ママなのに……

はしたなくイッてますっ!!

ああっ！ 女に戻ってますっ!! はうううっ!!」

「ああっ……すごいよっ！

母乳が止まるどころか……ドンドン出てくるっ!!」

「はあん…… 飲みきれませんわあ……

あっ……んぶっ……んぐっ!!」

「はあ……あっ……吸われてますっ……

あっまたイっ……ぐう！ はああっ！ あはっ……はああ」

何度も絶頂した絹保は軽く放心状態になった。

「ちよっと、やり過ぎちゃったかな……絹保がおちついたら……次は万彬の番だよ……」

「ああ……わたくしも同じように、乱れてしまうのでしょうか……怖いけど……楽しみですわあ」

その目は期待に満ちあふれていた。

絹保が落ち着きを取り戻し、今度は万彬の番となった。

「絹保にできたんだ。きつと万彬も母乳出せるよ……」

「はい……そう言われると、出るような気がしてきました……」

押し上げるように下からアソコにペニスを突き立て、子宮口をずんっと押し上げる。

「あっ……はあ……素敵ですわあ……あんっつ!!
子宮が押し上げられてっ……」

は

あ

んっ

「赤ちゃん起きてるかな？
僕達の愛情、届いてるかな……」

アッ
ズニッ

「寝ていてもきつと届いてます……
今までもずっとずっと受け取っていますわ。」

「絶対におっぱいださうね。赤ちゃんのためにも……
どうだい？むずむずしてきた？内側から、染みでてきそうかな」

「はもっ……んむ んむ……」

絹保がさっきのお礼とばかりに、乳首にしゃぶりついている。
もう片方の乳首も指で摘んで、きゅっきゅつと押しつぶすように刺激を与えていた。

「はあっ……あっ……乳首がなんだかつ……むずむずしてきましたわっ……
ああ……私も出せるかも……いえ、きつと出ますっ!!」

「いいよっ! イッパイだそうねっ! 赤ちゃんより先に味見させてっ! それっ!
オマンコの刺激、おっぱいに届かせてっ!」

「はいっ……ああっ! 登ってきます……気持ちいいの……下からっ ああ……胸にっ!!」

ああ

「ああ……はもっ……
段々ミルクの香りが……
あっ……段々と濃くなってきているような
もうすぐ……出ますわ……」

あ

「だって……がんばろうねっ!」

「あっ……はいっ……だしますっ……
絶対に……ああんっ!」

乳房と大きなお腹が僕の上でゆっさゆっさと揺れる。
二人分の重みがのしかかってくる。
あくまで優しく、それでいて万彬が感じられるように、
僕は腰を動かし続けた。

「はあ……ああっ!!」
間もなくして万彬のおっぱいから、
白い液体がにじみだしてきたのだった……

むず

スッ

むず

「ああ……わたくしも……おっぱいが出ましたわ!はああんっ!」

絹保が「ごくごく」と、次々あふれだす母乳を飲み込む。
もう片方の胸からも、指がぎゅゅと乳首をつねるようにするたびに
びゅゅと吹き上がっていた。

はあんっ

おん

ひゅひゅ

「あっ……はあんっ!! わ、私も赤ちゃんが……
ああっ 中で動いています
もう……まだおっぱいわ飲ませられないのに……
早く欲しいと、言っているみたいですわあ」

ズッ!

ニギッ

「なら、生まれた時にたくさん飲ませてあげたいね
いまからもっともつと、出しとこう!」
「おっぱい出せば出すほど、よく出るようになるよ!」

「はいっ……いっぱい出しますっ! はあっ 絹保さんっ……ああっ もっとお願いしますっ!!」
「ふあい……まかせてくださいっ……んっ ごくっ……んちゆるるっ!」

「ああ……僕もの方も出ちゃいそうだよっ!!
赤ちゃんに壁越しに射精するよっ パパの愛情注ぎ込んだじゃうっ!」

「はいっ……赤ちゃんもきゅと感じるはずですよ……ああんっ!
ああ……パパの感じてっ! あっ! 叩いてますっ!!
私のお腹あつ! はあんっ……幸せですわっ!」

「き、きますっ……あぁっ……イクっ……イっくうんっ!!」
「僕もっ……射精すっ……んぁっ!」

「はぁっ……あっ……たくさん……
あふれてっ……きてひまふっ……はおおっ!」

僕が流し込んだ精液に押し出されるかのように、
すごい勢いで母乳が飛び出し始めた。

「あぁっ……僕にも飲ませてっ」
「ふぁいっ おまかせくださいっ!」

あ

はぁっ

プチャッ

はぁっ

ドボン

絹保の水流操作ハイドロハンドによって、ミルクの一部はありえない軌道を描いて 僕の口に流れ込む
「んぐっ……ごくっ ぷはぁっ……すっごくおいしいよっ……赤ちゃんもきつと悦ぶね……」

「あっ……はぁあー…… あ、ありがとうっさいまふっ…… はぁっ!!
おっぱい出すの……気持ちいいですっ……あぁんっ!」
「おっぱい出してイクこと覚えちゃったんだね! すごいよ……」

二人の身体が母親として完成されていくことに、素直に喜びを感じた。
出産する日が本当に待ち遠しかった。

あッ ンガ

--- いっしょに出産 ---

二人一緒に出産できればいいね……と常日頃から話し合っていた。ちょうど、二人が妊娠したタイミングも同じだったし、どちらかが先に子供を産んで育てると、もう片方がうらやましがってしまうだろう……ということから。

僕達がそう思っていたことで、彼女たちの体に僕の能力が影響を与えたからだろうか、二人の出産タイミングは同時にやってきた。

この界限では定評のある、カエル顔の医者のところに入院、出産を迎える運びとなった。

「ここは産婦人科じゃないんだけどねえ……」

なんて愚痴を漏らしているところを見ると結構な頻度で僕らみたいな秘密にせざるを得ない出産に立ち会っているようだ。

……さて、いよいよ出産だ。

二人仲良く並び、四つん這いになる。局部を僕に向かって見せつけるように尻を突き出す。

そこに塩分濃度を高めたお湯を二人の能力を使って、お尻の周りにうかべて浸かった状態を維持させる。

お湯により身体をリラックスさせ、膣口と内部の産道を柔らかくして広がりやすくするためだ。

湾内絹保の能力で水を操作して出産途中の赤ちゃんの状態をさぐってもらうこともできる。

ということで、水で囲むのは利点が多い。

「あつ……ああ……動いてます……ごりごり回りながら私の中を……」
「赤ちゃんの頭が……はああんっ!! 産道、擦られてますわあ……」

「きつくはない?」
「痛かったり、辛い時は言うんだよ」

「きついどころか……気持ち……いいですわあ」

「ああ……出産で感じるなんてえ……」
その言葉を証明するかのように、二人とも恍惚の表情を浮かべている。

「早速親孝行な赤ちゃんだね。ママを生まれる時から」

「気持ちよくさせちゃうなんてね……」

「はい……ああ……気持ちいい所……」
「擦られますっ! イクうっ! はうんっ!!」

「ああ……そんなっ……イッ……ぐっ!!」
「赤ちゃんにっ……イカされっ!!」



ひくひくアソコを震わせ、二人ともイキながら出産を続ける。

次第に膣が盛り上がり、赤ちゃんの頭頂部が押し開かれた膣回から見えるようになっていた。

「赤ちゃんの頭のとっぺん、見えてきたよ……」

「ああ……もうすぐなのですね……陣痛気持ちいいっ!!もっど……んっ……はあっ!」

あゝ♡

は♡

「ああ……赤ちゃん……もうすぐ逢える……楽しみですわっ……あんっ!」

「はむっ……ああ、万彬さんっ……」

「んっ……ペロ……絹保さん……」

下半身から生じる快樂に気分が高揚したのか、二人はキスをして舌と舌を絡ませ合うのだった。

♡は♡

♡は♡

赤ちゃんの頭は時間が経つにつれて、ドンドンせり出し出してくる。おしりの谷間はすっかりなくなっって膨らみきっていった。

「はあ……っ!! あああんっ!!
ま、まだ広がるのでしょっつかっ」

「あっ……ああんっ……どんどん動いてっ……
内側からえぐられてえ……」

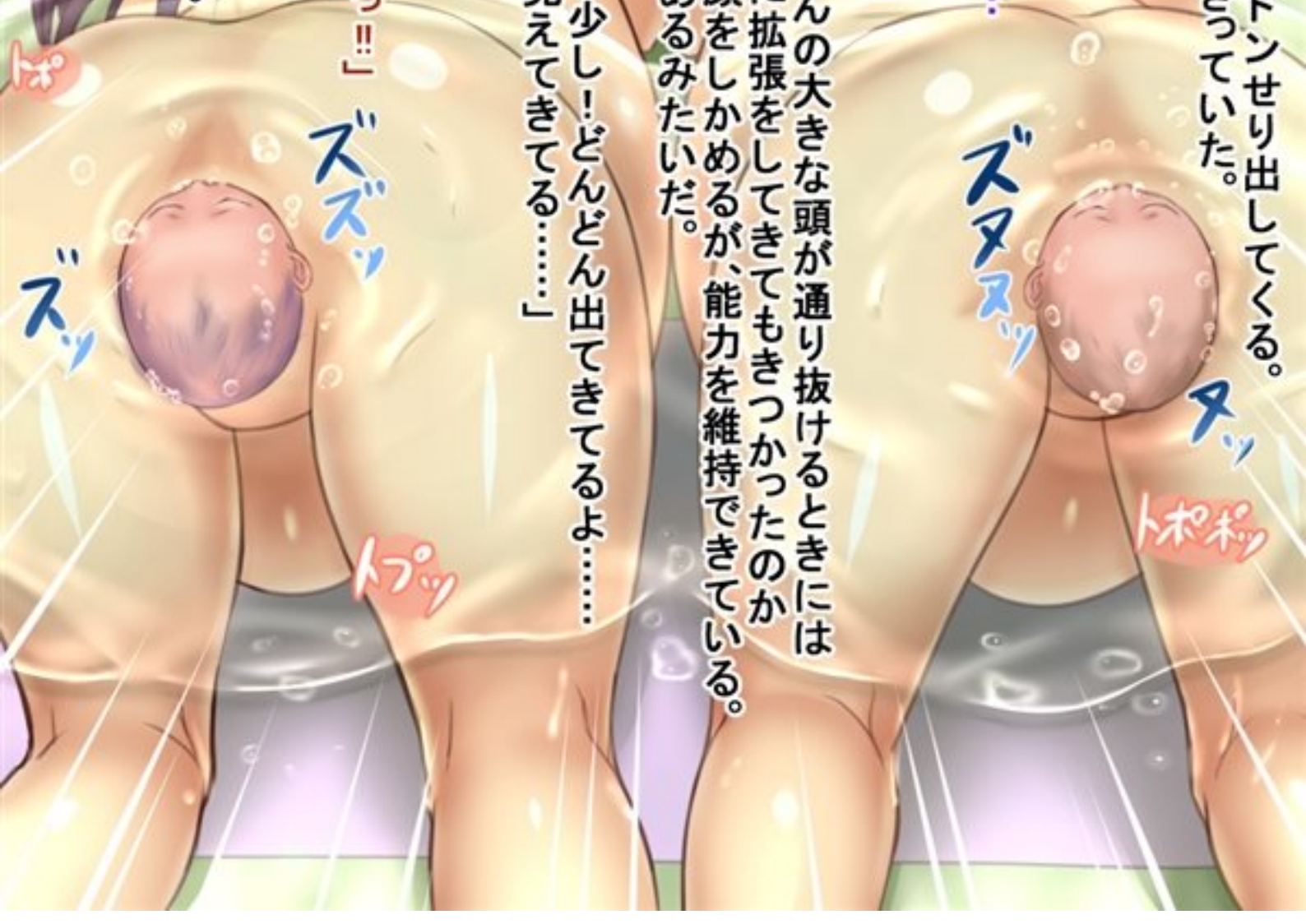
赤ちゃんの大きな頭が通り抜けるときにはさすがに拡張をしてくてもきつかったのか二人も顔をしかめるが、能力を維持できている。余裕はあるみたいだ。

「ほら……もう少し!どんどん出てきてるよ……
可愛い顔が見えてきてる……」

「ああ……早く逢いたいですわ……あっ あっ!!」
「もうすぐ……はああんっ!!」

ついに赤ちゃんの頭がすっぽりと飛び出す。

「頭が全部でたよっ!! あとは
身体を引き抜いただけだね……」



水の塊が頭の周りにまるで手で包んでいるかのように
まとわりつく。絹保の水流操作だ。

「いいよ……じゃあ、身体を引き抜いて……」
「はい……んっ……!!!」

二人の赤ちゃんはみるみるうちに全身が
外に引き出されていった。

「はあっ……身体が軽くなりましたわあ……
やっと……逢えましたわあ」

ほあ
は

ああ

あっ

「ああっ……! ついに……生まれたのですねっ!!
私達の赤ちゃんがっ!!!」

「二人とも元気に動いてる……!」

生まれたばかりの赤ちゃんは
水の中で宇宙遊泳をするように
ばたばた手を動かして漂っていた。



「二人近づいて……そうそう、腕を組んだらピースして……」

「はい……そうですね」

「これで……いいですか？ うふふっ」

二人の姿を撮影。しっかりデータとして収める。



かつて処女を奪った時と同じようなポーズを取らせる。
前と違うのは、産まれてまだへその緒で母親とつながったままの
赤ちゃんと一緒にということ。

「ああ……あなたの赤ちゃんをこうやって無事に産むことができました…」

「わたくしたち……こんなに幸せな気分で、本当にいいのでしょうか」

「いいんだよ……これから赤ちゃん育てるのに大変になるんだから
今だけでもこの幸せを噛み締めていよう」

「はい……ああっ……これから育てていくと想像すると……」

「ああ……胸がムズムズしてきましたわあ」

出産したこともあって二人の胸から染み出してくるかのように
母乳が溢れだす。



「ほぎや……」

「んぎやあ！」

赤ちゃんはその甘い匂いに釣られたのか、
手や頭を動かし、早く飲まてほしいと言っているかのように
からだを動かして、激しく鳴き声を上げ始めた。

「元気な赤ちゃんたちだね！」

「ええ……あなたと私達の赤ちゃんたちですもの……」

「きっと素敵な子供に育ちます！」

あれからすっかり母親として赤ちゃんの面倒を見ることにも慣れてきた二人。

妊娠でちょっと崩れた体型もすっかり元通りだ。セックスを再開する余裕もでてきた。

「このオチンチンが私達の赤ちゃんの父親おチンチンです」

「私達にこんな素敵な赤ちゃんをくれたおチンチンです……」

カメラに向かって二人は宣言する。結果として僕の超能力レベルは向上していなかった。だから、まだまだ実習を継続していくつもりだ。

「私達……また種付けしてもらいますこの……ペロっ……素敵な精液で……」

「ああ美味しいですわあ……お腹の中に注いで下さい我慢できませんわ！」

二人は僕のペニスから滴り落ちる垂れ落ちる精液を舌で丁寧に舐めとっている。

「下の口にもいっぱい注いであげるからね……もっともっといっぱい産んでにぎやかで素敵な家庭を築こう！！」

「はい……！！ 私達の方こそお願いします！！」
「もっともっと……いっぱい家族を！」

二人の胸に抱かれてすやすやと眠っている子供二人のを見つめ……僕はこの幸せを絶やさないと誓った。